

令和3年度を迎えて

～教育の歴史的転換期を迎えて～

埼玉県教育委員会 教育長 ^{たかだ}高田 ^{なおよし}直芳



日本の学校教育はいま、歴史的な転換期を迎えています。やや大袈裟な物言いに聞こえるかもしれませんが、このように感じている人は少なくないと思います。

「主体的・対話的で深い学び」を目指す新学習指導要領が小学校に続き中学校においても今年度から全面実施、高等学校も実施まで1年と迫り、新しい時代の教育が本格稼働します。今年1月には中央教育審議会から「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」と題した答申が出され、2020年代を通じて実現すべき教育の姿が浮かび上がってきています。また、新型コロナウイルス感染症への対応を通して、教育の在り方が現在進行形でめまぐるしい変化を見せていることについては、あえて言うまでもないでしょう。

埼玉県においても、こうした時代の流れを踏まえつつ、様々な取組を進めているところです。

◆ ICTを活用した教育の充実

本年度、教育局に「ICT教育推進課」を新たに設置しました。昨年度中に、市町村立小中学校及び県立学校のICT環境の整備が劇的に進み、次なる目標は、その環境を最大限に生かして児童生徒の学びを充実させることに他なりません。この目標達成に向け、組織体制を一元化し、校種を越えて県全体としてICTを活用した教育の充実を図ろうということです。

ICT活用により、教育の可能性は多彩な広がりを見せます。日々の授業における活用の工夫はもとより、大学をはじめとした外部機関や海外の姉妹校を結ぶことで、現地に行かずして新たな知や多くの人と出会うことが可能になります。また、様々な事情から登校できない児童生徒とオンラインでつながることで、途切れなく学びを提供することも可能になるでしょう。日常的に教員誰もがICTを効果的に活用できるようにすること、これを第一の目標にしたいと思っています。

一方で、私達がこれまで積み上げてきた教育手法や教育実践の価値に改めて気づかされた1年でもありました。これまでの実践とICT活用とのベストミックスを探る、そんな姿勢が求められると考えています。

◆ 高校再編と県立学校の魅力化・特色化

令和5年度の開校を目指し、今年度から北部では児

玉新校（仮称）、西部では飯能新校（仮称）の施設等の設計に着手します。児玉新校の「地域産業を支えグローバル社会で活躍できる人材を育成する高校」、飯能新校の「進学を重視した地域と協働する高校」というそれぞれの基本理念を踏まえ、開校に向けた準備を今後さらに具体的に進めていきます。

将来に向けて生徒数の減少が続く状況の中で、県立高校の再編は避けて通れない道ですが、再編は、県立学校の魅力化・特色化と一体的に進めるものであると考えています。今回の中教審答申においても、「普通科改革」や「専門学科改革」といった視点が示されました。これまで県立高校が育んできた歴史と伝統を大切にしながら、時代の流れや県民のニーズも捉えつつ、将来構想を進めていきたいと思っています。

◆ 子供たちの心のケア

文部科学省の公表データによると、昨年1年間に自殺した小中高生は499人で、前年の399人から100人増え、過去最多だったということです。自殺にまでは至らずとも、心の不調に悩む児童生徒は相当数いると思われ、急ぎ対策を講じなければならない課題です。

県では、児童生徒が自ら援助を求める力の向上や、児童生徒から発信されるSOSを学校全体で受け止めて支援していく体制強化に向けた研究を行うべく、昨年11月、東京大学大学院と連携協定を結びました。今後、この研究の成果も十分に生かしながら、未来ある子供たちの心身の調和のとれた成長に向けて、全力で取り組んでいきたいと思っています。

ここで話題にした事柄のほかにも、デジタル教科書、小学校高学年からの教科担任制、STEAM教育など、いま教育界には新しいトピックがあふれています。時代の風を敏感に捉えながら新しい地平を目指して疾走する、それはそれで大切ですが、こういう時こそ本質を見直す必要があります。学校教育の意義は何か、教師の役割は何か、子供たちをどのような人間に育てていくのか、こうした根源的なテーマに対する「哲学」があってはじめて、教育の内容や方法は選び取られるべきものです。転換期のいま、小手先の改革ではなく、本質の追究を目指して取組を進めてまいります。